

南東アラビア山麓峡谷における山岳牧民の起源を探る —オマーン、タヌーフ地区における考古学調査(2024~2025年)—

三木 健裕 慶應義塾大学文学部准教授
黒沼 太一 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
田邊幹太郎 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
相馬 拓也 立教大学環境学部准教授
近藤 康久 総合地球環境学研究所教授

Exploring the Origin of Mountain Pastoralists in a Canyon of Southeastern Arabia: Archaeological Investigations in the Tanūf District, Oman in 2024-2025

MIKI, Takehiro Associate Professor, Faculty of Letters, Keio University
KURONUMA, Taichi Assistant Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies
TANABE, Kantaro Doctoral Course Student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo
SOMA, Takuya Associate Professor, School of Environmental Studies, Rikkyo University
KONDO, Yasuhisa Professor, Research Institute for Humanity and Nature

1. はじめに

筆者らは2017年以来、オマーン内陸部、ハジャル山脈の南麓に位置するタヌーフ峡谷(図1)において考古学調査を継続している。アラビア半島南東部は砂漠気候でありながらも、インドモンスーンに起因する季節的降水によって、水資源に比較的恵まれている。紀元前4千年紀末に始まる前期青銅器時代ハフィート期

(前3300~2700年)には、オアシスでの定住農牧が開始された。続くウンム・アン=ナール期(前2700~2000年)にはオアシス集落網が発展し、メソポタミア・インダス両文明との交流も盛んに行われた。しかし前2千年紀前半のワーディー・スーク期(前2000~前1600年頃)に入ると、地球規模の急激な気候変動を一因として社会は遊動化へ向かう。この時期、特に内陸部においては、墓を除いて考古学的な痕跡に乏しい。この地域で定住を伴う人間活動が再び活発になるのは、前2千年紀末の前期鉄器時代(前1300~300年)まで待つことになる。

筆者らはタヌーフ峡谷のムガーラトゥ・ル=キャフ洞穴で発掘調査を実施し、考古学的な痕跡に乏しいワーディー・スーク期の実態を解明する上で極めて重要な手がかりを得た(Miki et al. 2022)。洞穴開口部に設定した発掘区からは、良好な堆積から土器や石製容器に加え、放射性炭素年代測定試料やヤギ糞などが検出された。これらは、気候乾燥化によって山麓オアシスでの生活が困難となった時期においても、この山岳部で人間活動が継続していたことを示す貴重な証拠である。この洞穴の発掘成果から、筆者らは、タヌーフ峡谷をふくむ山岳環境が、気候悪化を乗り越えるレジリエントな生業を可能にする空間として機能したのではないかと、という着想に至った。現代のオマーンには、砂漠のラクダ牧民(ベドゥ)とオアシス定住民(ハダル)

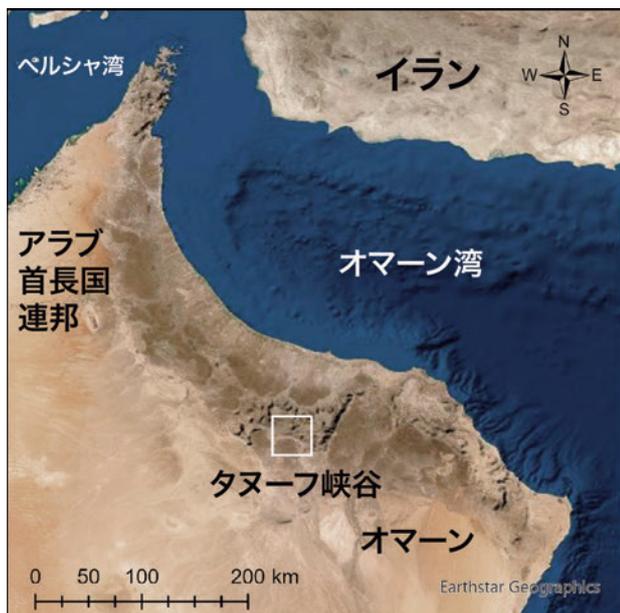


図1 オマーン北部、タヌーフ地区の位置。

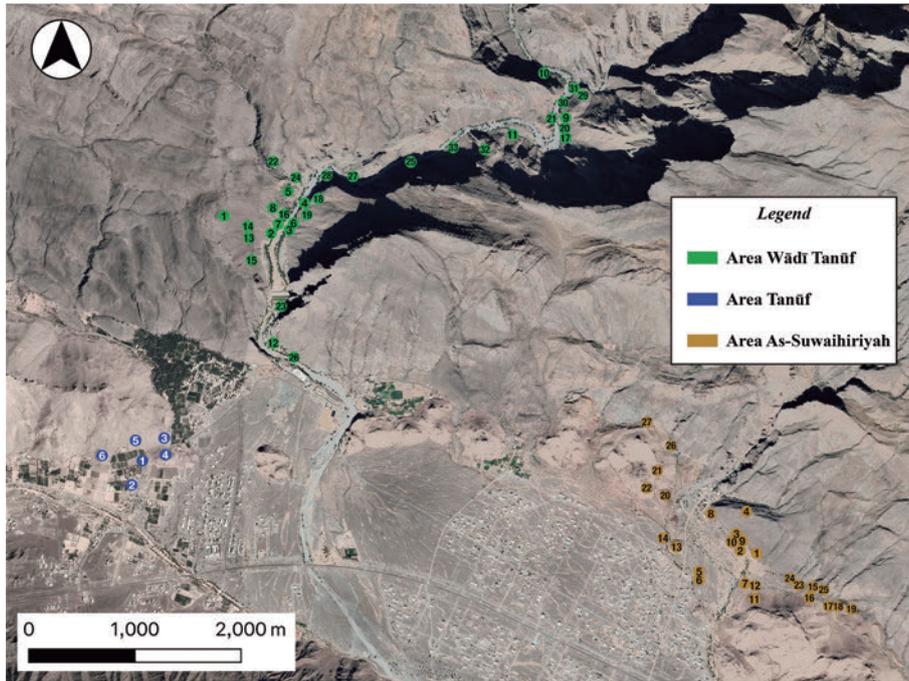


図2 2024-2025年調査終了時のタヌーフ地区における遺跡の分布。

のあわいに、山岳地帯でヤギの遊牧を行う「シャワーウィ」と呼ばれる牧民が存在し、調査地であるタヌーフ地区でも生活を営んでいる。前3千年紀末の気候悪化に際し、山麓オアシスから山間部へと生活の場を移した定住民こそが、この現代に通じる山岳牧民の起源ではないか。筆者らはこの仮説を検証すべく、2024年度より科研費基盤A「南東アラビアの先史遊動民が山岳牧民に変容する過程の文理総合研究」プロジェクト(研究代表者：近藤康久)を開始した。本報告では、山岳牧民の形成過程を探るために実施した2024～2025年度の考古学・民族誌調査の成果を報告する。

2. 広域踏査

見通しの効きにくいタヌーフ峡谷では、踏査のたびに新たな発見が続いている。今シーズンは峡谷内の未踏査地区を中心に調査を行い、9地点の遺跡群を新たに確認した(図2)。峡谷入口のオアシス周辺に位置する既知の遺跡群についても追加踏査を行ったほか、峡谷から南東約4kmにあるアッ=スワイヒリヤ周辺でも踏査を継続し、2遺跡を発見した。既知の岩絵についても再調査を実施した。以下、特筆すべき発見について記述する。

タヌーフ峡谷内の調査では、峡谷段丘上に位置するWTN28遺跡において、墓や住居と推定される遺構を多数確認した。今後、詳細な追加調査を予定しているが、中でも1号墓は平面形からワーディー・スーク期

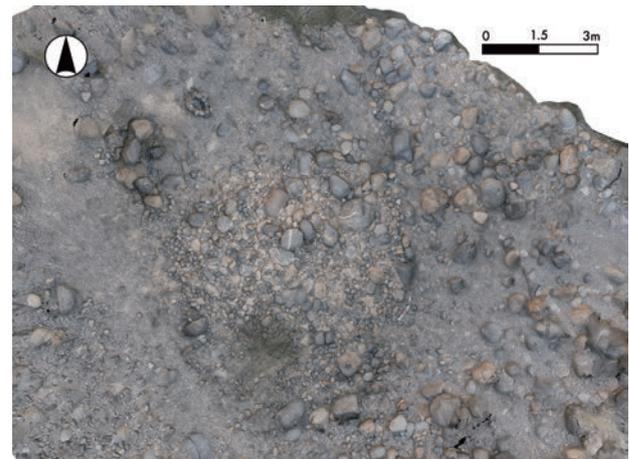


図3 WTN28遺跡第1号墓のオルソ平面写真。

のものとみられる(図3)。峡谷内における同時期の墓地は、これまで入口寄りのWTN07、13、14しか確認されておらず(Kuronuma et al. 2021, 2024)、今後のさらなる調査が期待される。一方、標高の高い斜面上に位置するWTN32遺跡では、残存高3.1mにおよぶ、峡谷内で最も保存状態の良いハフィート期の積石塚が発見された(図4)。これまでの積石塚の分布とあわせて考えると、タヌーフ峡谷が古代より山岳部と低地をつなぐ遊動民たちの主要な移動経路であったことが強く示唆される(Kuronuma et al. 2022)。

峡谷入口付近には、1970年代に報告されたハフィート期とみられる円形基壇TNF01遺跡と、それを見下ろす位置にある積石塚群TNF05遺跡がある



図4 WTN32 遺跡第1号墓のオルソ立面写真。



図5 TNF01 遺跡のオルソ平面写真(上)と TNF05 遺跡のオルソ平面写真(下)。

(de Cardi et al. 1976)。詳細な記録が未だなされていないため、ドローンを用いた写真撮影およびフォトグラメトリによる三次元記録を実施した(図5)。その結果、TNF01の円形基壇は岩脈の直上に築造されており、内部に建築構造を持たないこと、および南東部に付属施設を伴うことを詳細に記録できた。また昨年報告したTNF05遺跡についても、斜面に基壇を造成して構築された点や、付属する土留め壁・壁龕状遺構などの空間情報を、より詳細に把握することができた。TNF05の墓群は、構築により多くの労力が投じられた点で、峡谷内部で遊動民が築いた積石塚とは異なる。

3. 青銅器時代墓の発掘調査

昨シーズンに引き続き、ワーディー・スーク期から前期鉄器時代とみられる WTN07 遺跡第122号墓の発掘を行った。当該期のこの地域では単葬墓が一般的

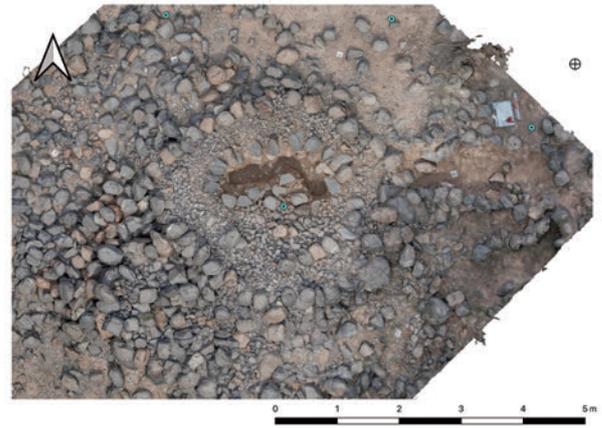


図6 WTN07 遺跡第122号墓のオルソ平面写真(2024-2025年調査終了時点)。

であるが、本墓はその規模と形態から集葬墓と推定される(Kuronuma et al. 2024)。昨シーズンの調査では、北東部の突出箇所を玄室への入口と仮定していたが、その後の検証により、これは墓本体から独立した付属施設であると結論づけられた。今シーズンは本体中央部のU字形を呈するとみられる玄室内部(北半分)の発掘を実施した(図6)。発掘の結果、玄室内北壁において少なくとも3段からなる石積み壁を確認した。一方、南壁側では明瞭な石壁を確認するに至っておらず、壁がさらに南側に位置しているか、あるいは石壁が存在しない可能性も考えられる。なお、人骨の残存状況は極めて悪く、微細な骨片が確認されるにとどまった。

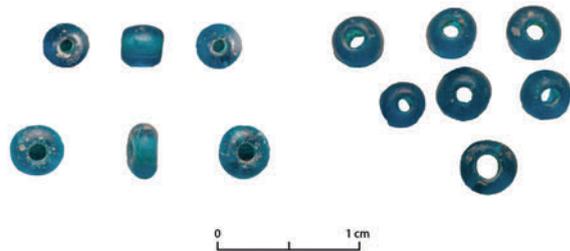
玄室内からは、前期鉄器時代およびワーディー・スーク期のもつとみられる土器片がごく少量出土した。特に玄室底面付近の下層堆積からは、紅玉髓製ビーズ、白色ビーズ、そして極小の青色ガラス製ビーズが出土した(図7)。各ビーズの産地同定は今後の理化学的分析に委ねられるが、青色ガラス製ビーズについては、紀元前1千年紀後半から紀元後1千年紀前半にかけて、日本を含む東アジアから西アジアまで広域に流通した「インド・パシフィックビーズ」である可能性が高い。これらの出土遺物は、122号墓が紀元前2千年紀前半(ワーディー・スーク期)の築造以降、紀元後1千年紀に至るまで、埋葬や追葬、あるいは再利用の場であったことを示唆している。

4. 青銅器～鉄器時代城砦の三次元記録

昨シーズンのタヌーフ峡谷、アッ=スワイヒリーヤに加え、新たにグブラト・ニズワを対象として、城砦の三次元記録および踏査を実施した。タヌーフ峡谷内では、舌状台地上に立地する WTN05 城砦において



図7 WTN07 遺跡第122号墓出土ビーズ類。



石壁の観察と遺物の表面採集を行った。台地北縁には、幅2.5m、残存高最大3.5mの石垣が、約40mにわたって延びている状況を記録した(図8)。アッ=スワイヒリーヤでは、独立丘を利用して築かれたSWH13城砦の記録作業を完了した(図9)。本城砦は、丘頂部の大型石垣、中腹の平坦な空間、そして麓に展開する矩形エンクロージャー群から構成されており、本調査で記録した石壁は100を超える。さらにアッ=スワイヒリーヤの東約9kmに位置するグブラト・ニズワでは、GNZ04城砦にて土器の表面採集を実施した(図10)。この城砦でも大型石垣が確認されたが、他の城砦と異なり遺物が豊富に採集された点で重要である。土器の年代は前期青銅器時代ウンム・アン=ナルル期、鉄器時代、イスラーム期と多岐にわたる。特にウンム・アン=ナルル期の遺物が確認されたことから、当初は防御的な性質を持つ施設として利用され、鉄器時代以降に城砦となった可能性も含めて検討する必要がある。これらの城砦はいずれもワーディー沿いの交通の要衝に立地している。定住民や山岳遊動民にとって、戦略的に重要な拠点として機能していた可能性が高い。



図8 WTN05 城砦北縁の石壁。



図9 SWH13 城砦構築物。



図10 GNZ04 城砦。

5. 現代ヤギ牧民の民族誌調査

古代のヤギ牧民の行動様式に関する手がかりを得るため、今シーズンより民族班が始動し、現代牧民の牧



図11 タヌーフ峡谷における現代のヤギ放牧。

畜行動および山岳環境の利用に関する在来知のデータ収集を開始した。具体的には、タヌーフ周辺の峡谷奥地に点在する5ヶ所の集落および放牧拠点を訪問し、ヤギ放牧の実態に関する詳細な聞き取りを実施した。その一例である標高850mに位置するアル=ファラ村には、6世帯が拠点を有しているが、通年定住しているわけではない(図11)。普段は麓のオアシス集落であるタヌーフに居住し、放牧と農作業のために毎朝山へ通うという、オアシスと山岳を日々往還する生活を送っている。ヤギの飼育規模は約500頭であり、2名の牧夫が早朝5時に拠点を出発し、約12時間にわたって放牧を行う。今後は、ヤギの放牧範囲や利用植生を詳細に記録し、遺跡分布との相関を分析するなど、在来知を含め、さらなるデータ蓄積を図る予定である。

6. まとめ

2024-2025年度の現地調査では、広域踏査、墳墓の発掘、城砦の記録、そして民族誌調査という多角的なアプローチを通じ、古代山岳牧民の峡谷内における活動実態や移動経路、さらには自然人類学的分析用の試料採取に向けて、予備的な成果を挙げることができた。あわせて、現代牧民が有する山岳環境の利用に関する在来知に関しても、予備的な知見を蓄積することができた。今後は次シーズンに向けデータの整理・分析を進めるとともに、出土試料を用いた古代DNA分析や

プロテオミクス分析といった理化学的アプローチを導入する。文理総合の観点から、南東アラビアの先史遊牧民がどのように環境に適応し、山岳牧民へと変容していったのかを追跡していく。過酷な乾燥化を乗り越えた古代の人々のレジリエントな適応戦略を解明することは、気候変動に直面する現代社会において、持続可能な暮らしを再構築するための重要なヒントとなるはずである。

本調査はJSPS科研費(JP21H00605、JPJP24H00112)の助成を受けて実施された成果の一部である。調査にあたり、田中壘(慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程)、蔦谷匠(総合研究大学院大学統合進化科学研究センター助教)、板橋悠(筑波大学人文社会系准教授)、太田博樹(東京大学大学院理学系研究科教授)、本間友理(東京大学大学院理学系研究科修士課程)、近藤洋平(福岡女子大学国際文理学部准教授)の各氏から学術的なご支援を賜った。末筆ながら、記して心より御礼申し上げます。

参考文献

- ・ de Cardi, B., S., Collier, and B. Doe 1976 Excavations and survey in Oman, 1974-1975. *The Journal of Oman Studies* 2: 101-187.
- ・ Kuronuma T., T. Miki, and Y. Kondo Y. 2021 A Bronze- and Iron Age cemetery at Wādī Tanūf, Ad-Dākhiliyah: A preliminary report of years 2019-2020 survey. *The Journal of Oman Studies* 22: 99-125.
- ・ Kuronuma T., T. Miki, and Y. Kondo Y. 2022 Early Bronze Age cemeteries in Tanūf District: Ad-Dākhiliyah Governorate. Preliminary report of years 2017 to 2020 survey. *The Journal of Oman Studies* 23: 70-100.
- ・ Kuronuma, T., K. Tanabe, T. Miki and Y. Kondo 2024 Tombs and landscapes in a canyon of the al-Hajar mountains. Results of the surveys at WTN07 in the Tanūf District (North-Central Oman), 2022-2023. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 53: 104-118.
- ・ Miki, T., T. Kuronuma, H. Kitagawa, and Y. Kondo 2022 Cave occupations in southeastern Arabia in the second millennium BCE: Excavation at Mugharat al-Kahf, North-Central Oman. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 33(1): 85-107.
- ・ 黒沼太一・三木健裕・田邊幹太郎・近藤康久 2025「南東アラビア山麓峡谷における人間活動を探る—オマーン、タヌーフ地区における考古学調査(2023-2024年)—」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』44-48頁 日本西アジア考古学会。